夏祭り会場内を徘徊(ほうこう)していた、また、これからもするであろう 不当侵入者 あやしげな男達 について

今年の夏祭り最終日のことか、八月一六日付の毎日新聞（朝刊）の記事になっている。見出しは「盆踊りの労働者騒ぎ、五人逮捕」西成・警官とにらみ合い」

警察との衝突は公園の南側夜店のあるあたりから始まった。私はその時、パネル展示のあった公園の北側にいたので、どういうことからそうなったのかよく知らないが、その記事によると、次のことのようだ。

「盆踊り終了時刻をすぎた日十時十五分ごろ、日暮の向当隆警備課長ら私服警官十数人が主催者の同祭実行委員会に「時間オーバー」の警告をしようとしたところ、火の付いた篝竹やカラ缶の空きビンが投げつけられ、次々と逮捕者が出た。これに対し労働者二人の計四人が頭や腕などに軽いケガをした」と、より現場のコンイキた近側が警官に詰め寄り、一時小ぜり合いとなり警官二人、労働者二人の計四人が、頭や腕などに軽いケガをした。

逮捕された五人はいずれも男性で、名前など一切黙秘しているという。

見出しではっ労働者騒ぎ」となっているが、西成署の署員、特に私服警官といわれる人達も相当えたいの知れない人達も相当に騒いでいたのだから、ちょっと長いが盆踊り会場で労働者と警官騒ぐ」が正しいと思う。

また、記事もっ投げつけられ、逮捕者が出た。これに対し労働者側が警官に詰め寄り、一時小ぜり合いとなり次々と逮捕者が出て、警官二人、労働者二人の計四人が頭や腕などに軽いケガをしたとより現場のコンイキた近

新聞のいう、山ぜり合い。のあいまに、南線側の道路上で、本顔メが不の多分私服警官と思われる人かい、なにやらコウフンしたおもちで"警察をナメてる。許せん…"と言いなから歩いていた。まさかあれか爆竹やらを投げつけら山た警備課長向当某ではあるまいが……。

いったいなにが"許せん…"のか、警察をナメるとはどういうことかよくわれらないが、状況からすると、次のようにこの人は考えていたのではないか。

①の届け出た時間を超えて盆踊りを続けた実行委のやり方が警察を恐れぬものである。

②警備課長という、西成署の組織あるいは警察機構の中で、地位が高く、重責を担うと考えられているものに対して物を投げつけるとは、なにごとであるか。

③ここは一発、ガンとぶちかましてやつらに教訓を与えねばならない。

これはある一定部分の私服警官と思われる人達の共通認識でもあったらしく、それら以上た公園内を駆かせた。

警備課の課員にとっては直接の上司かい、西成署あるいは警察に帰属意識の強い人にとっては警察が、ナメられたとあっては、ちょっと痛めつけてケジメをつけなくてはならないと考えるのは、マア、わからないではない。ヤクザのメンツ・ケジメに対する思いが推察可能なのと同じ程度に。

＊

騒ぎの一方の当事者であるところで、もう一方の当事者であるこの祭りをつくっていた労働者の思いも考えてみる。主として私服警官とのからみで、私が見聞した範囲という限定つきだが。

八月一二日午後一時過ぎ頃、祭りの準備でヤグラを立てている三角公園の西側を、アブレをもらいに行くためにセンターに向って歩いている、と、舞台の裏、地蔵さんの横に二人の男がいるのが見えた。一人はサクにすわって公園の

＊

祭りの初日である二日目には、夜店で何を売っているか私服警官と思われるノゾキにくる私服警官と思われる人達によって、夜店のまわりは労働者がちょっと近よりがたいヘンイキが作りだされた。

その中の一人は、ワザとらしく、白いビニール袋に何やらほうりこんだのを肩にかけ、マンガを売っているくらい古本、マンガこんでいたらしくたばらくたった夜店をノゾキこんで、それを見とがめた労働者に、何か入ってんねん、と言うのと同時に袋を後からハネ上げられてびっくりし、何やねん、とケンカをふっかけていた。

私がそのニ人に近づいていくと、もう一人のこれも私服警官と思われる男が、白い袋を持つ男に素早く近寄り、何やら耳うちして、二人一組に公園の外に出た。残された労働者は、何が何やらわからんとはいった顔をしていた。

夜店は祭りに集った労働者のために店を開いているのであって、私服警官の調査報告書の量を多くするために店開きしているのではない。

労働者が近寄りにくいフンイキをこしらえるほど集ったお客のまわりをハイカイした私服警官のことを、労働者達はどのような目でみていただろうか。

＊

祭りの二日、三日目は、韓国で起きた光州市民弾圧の様子を伝えるパネルなどが展示されていたところにへたりこんでいたが、なにやらエタイ

の知れぬ男達が五・六人固って、定期便のようにパネルの前を通りすぎていった。またその周辺には、四、五人、あるいは二、三人づれの男達がうろうろし、ときおり踊りの輪の方をながしては、あれは誰それだ、などと話をしていた。時折、軍隊調の礼をしていたりする彼らは何者なのか。労働者がうさんくさそうな目付きでながめ、そのまわりをうろうろすると、さりげなく場所を移動したりする彼ら自身、自分達が歓迎されない客であることを知っているのだろう。

公園の中を徘徊していた男達が何者か、いちいち聞いたわけではないからよく判らない。しかし、労働者達が彼らがスパイの場にいることを心良く思っていなかったことだけは確かだろう。できることなら警察の場から追い出したいとも思っ…。

公園の中を徘徊していた男達が私服警官だとして、彼らの目的は一部のいわゆる活動家を監視することにあるのだ。

目的やダンドリが悪ければだれも乗らない。仕事やダンドリが気にくわねばトンコが定法なのだから。それゆえ、目的やダンドリによって、集りその他のものを妨害したり、労働者の組織を監視したりするものではなく、としても、事情はかわらないだろう。

釜の労働者がまとまって動くとき、仲間を殴った飯場頭を押しかけるとき、賃上げの団交に行くとき、そのときは参加する者全員が活動家なのだ。現場で古参やその仕事をよりよく知ってるもの、あるいはなりゆきでやりたがりたなどがダンドリするように、それらの行動の時にもダンドリをするものはいる。しかし、行動を共にしている労働者の一人一人は、その行動の目的、やり方をよく心得、共感しておりかしていると考えるものはいなかしていないたせ、日々体を動かして稼いでいるのだから、体を動かすということはない